『基礎教育センター研究紀要』，第11号，91-100，2021
KYUSHU SANGYO UNIVERSITY, *Center for Fundamental Education Review* No. 11, 91-100, 2021

【研究論文】

古井由吉「背中ばかりが暮れ残る」論

和田　勉

一　はじめに

「背中ばかりが暮れ残る」は、平成六年三月の「群像」に発表され、同年八月に刊行された『陽気な夜まわり』（講談社）に収録された。[一] 古井の五十七歳の時の作品である。後に刊行された『古井由吉自選短篇集　木犀の日』（平10、講談社）にも再録されており、古井自身にとっても評価の高い作品であると思われる。

本稿では、「背中ばかりが暮れ残る」の内容について詳しく考察する。また作者の年譜的な事実と比べることで、この作品の執筆動機なども解明したい。更に二項対立と両義性という視座からも考察する。

まず「背中ばかりが暮れ残る」の先行研究について見ていく。島弘之は「新潮」（平6・12）の『陽気な夜まわり』の書評で、「『背中ばかりが暮れ残る』で締め括っているのがニクイ」と述べている。影や分身などの意味を追求する『陽気な夜まわり』という短編集の特質を、最後に置かれた「背中ばかりが暮れ残る」が象徴的に示していることの巧みさについて言及しており、妥当な見解である。初老にさしかかった作者の心身の状況が、この作品集には如実に反映している。

また大杉重男は講談社文庫『木犀の日』（平10）の「解説」で、「氏の中で犬儒的なものはまだ決着がついていない。すなわち『背中ばかりが暮れ残る』（その題名は芥川龍之介の辞世「水涕や鼻の先だけ暮れ残る」を踏まえる）の主人公は、より踏み込んで犬儒的なるものを、心の中にいつも宿っている別人格として再考察する」と述べている。確かに社会的慣習や文明生活を軽んじ、無欲な自然生活を理想とする犬儒的[二]な生き方への関心や執着が描かれている。主人公における分身やドッペルゲンガーのような存在へのこだわりが露わに示されている。高度経済成長といった社会や世間に背を向けて、あえて隠遁するような生き方への願望や執着が描き出されている。

なお、芥川の辞世の句が孤独や絶望といった意識を象徴的に示しているのに比べると、古井の「背中ばかりが暮れ残る」は身辺の状況を随想的にも記している。

そもそも古井のような内向の世代を代表する作家と言われ独自な境地に達している作家の作品を解明しようとする場合には、作品の特質にふさわしい適切な方法を案出することも必要であろう。小説という形式そのものへの根深いアンチテーゼが込められていると思われるからである。その辺りについても、検証する。

本稿では、「背中ばかりが暮れ残る」の作品の分析だけでなく、古井の他の作品にも共通に見られる特徴を明らかにしたい。また、本作の古井における位置づけについても検証する。更に古井の作品の持つ特徴が、現代の文学においてどのような意義を持つかについても考察する。

二　作品の分析

「背中ばかりが暮れ残る」の冒頭には、「遠くで風が鳴り、男の目が起きかけたが、ひと声だけで吹き続くけはいもなく、背はまた坐り机の上へまるくなった。そうして終日ほとんど動かず、物を読んでいる。くたびれた上着に、冬場なので綿入れをはおり、膝には毛布をまわしているが、陽気が良くなってもそれほど身なりが更わるわけでない。暑さ寒さにあまり感じなくなっている。机の前には木枠の窓が埃にまみれた磨硝子を閉ざしている。冬には午後の早い時刻から翳りはじめる。住まいは六畳ひと間と台所と便所からなり、建替えの時期を逸した木造アパートの二階の端にあたる。角部屋なので南側の往来に面したほうにも窓があり、陽の差す部屋であったが、そちらの窓はとうの以前から雨戸を閉てきりにして、その前に家具が置かれている」とある。初老に至った主人公「私」の現在の心境が、背中[三]に象徴される形で描かれている。置かれている「六畳ひと間」の部屋は閉ざされた空間であり、主人公の心身の状況と重なっている。世間や社会から目を背け、一人机に向かう男の後ろ姿であり、浮世離れした生き方を生涯のほとんどにわたってして来たのである。

主人公は実社会とのつながりが断たれて隠遁しているような心境にいるが、そこでは「世間にたいする緊張の筋がすっかり断たれたのは、何時頃のことだ。時間の停まったのは何時頃のことだ。五十の坂でのことか。四十なかばのことか。何があったのだ。病気をしたのか。神経を傷めきったのか。頼みの仲介者が死んだのか。実家が崩壊したのか。女がよその男に通じたのか。それとも、往来で行きずりの、無縁の人間の、何とも感じていないはずの一瞥に、勝てなかったか」と自問自答している。そして、そのすぐ後では、「答えはなくて、私は勝手に嘆きつのる自分をあさましいように思って目をそむけ」てしまうのである。主人公は人の世の無常迅速を痛切に覚えながら、一方では「時間の停まった」澱んだような状態に置かれた原因を探すが、はっきりとはしないままである。

表題に関わることでは、「暮れ方に家に駆けもどって背中へ近づいて来た女を、手もとに引き寄せる。朝方に女の仕掛けていった炊飯

器からやがてかたかたと湯の沸く音が立ち、やがて飯の炊けるにおいの流れるその間、女を抱いて離さない。女の装いをまもるように、女の乱れを支えている。自身が老いても、女が老いても、その時刻の情欲は、生涯の意志のように、保ち続けた。女のほうも仕事のひける時から、電車に乗っている間も、あわただしく夕飯の材料を仕入れる間も、もう一歩も先へ進むのを厭うほどの長い疲れにつつまれながら、男を受け入れるからだになっている。指先に十年一日の感触がある。暗がりの中に男の、背中ばかりが暮れ残る」とある。自らの人生を客観的に振り返ると、俗世間に背を向けてきたような感慨があるというのである。しかも女が外で働き主人公は養われていたという、あり得たかも知れないもう一つの人生に、主人公の連想は及んでいる。人生の無常迅速を実感したまま、「三十年という歳月が経った」というのである。食欲や性欲などの根源的なものにしつこく付きまとわれながら、歳月はあわただしく過ぎてしまったのではないかという思いもある。

「あれは自己投影どころか、自分の背中そのものではないか。行き着く先の老耄の背に、まもなく寸分違わず重なる生涯の背中だ。何をしようと、いかに走りまわろうと、背後から見ればいつもあんなだった。ある夜、長いこと黙りこくっていた末に、そうつぶやいた」とある。主人公の意識から離れない座り込んだ背中について、見知った別の人物ではないかと思うこともあったが、煎じ詰めた自分の生涯の姿を見たような気がしたのである。脳裏に浮かぶ背中を自己投影に違いないと認識して、この世の無常を思うのである。

主人公の少年時代の回想としては、「廃線になりかかったようなさびしい鉄道だったが、ときどき日の暮れに、窓に煌々と灯をともした列車がやって来た。米兵を満載している。すると年かさの少年たちが自転車に飛び乗って駅へ急ぐ」とある。日暮れに荒涼とした光景を目撃した記憶について思い出している。これも煎じ詰めると、子供の頃に体験した人生の黄昏や無常につながる光景だというのである。

学生時代の回想としては、山登りの帰りに四、五歳上のサラリーマンと知り合う。工事現場の灯りについて、主人公は「日が暮れると、山の中から、夜の楼閣が湧いて出てくるような眺め」だと詩的に捉えている。これに対して四、五歳上の男は、「あれを金額に、換算できないでもない」と経済的なこととして割り切った捉え方をしている。この男からはその後ご馳走してもらうが、そういう状況になったこと自体を、主人公はどこかで疑問に思っている。駅で別れた後も、あの男こそ今となっては、背中に関わるのではないかと主人公の脳裏にいつまでも残ったのである。四、五歳上の男を企業人の典型として見ているのであり、それに対して一人机に向かう主人公は、浮世離れした生き方を強いられていると思うのである。

それでもあれも生業、これも生業ということでは、両者は表裏一体のようなものだということになる。四、五歳上の男は、企業人として懸命に働いてきたことについて、「しばしの夢みたいなものだっ

た」とか、「いい夢を見させてもらった」と主人公に語っていることは、それを示している。また、「私は家の内で日を暮らす人間となり、『これが稼ぎだから、』と机の前で一人で半日も徒労のような苦心をした末につぶやく時などに、多忙のさなかからこちらを振り向いて、そうなんだろうね、しょせん同じ、身の磨り減らし方なのだろうね、とやはり苦笑まじりにうなずいてみせる顔の見えることもあった」というところも同様である。文筆業で終日机の前に座っていようが、企業人としてあくせく動き回ろうが、煎じ詰めると似たようなものだというのである。

若い頃に山の中で道に迷った時に、視覚にすがるというよりもむしろ、聴覚や嗅覚による認識にすがろうとしているのが特徴的である。つまり「やがてにわかに耳があたりへひらいて、風の音の中で立ち停まった」とか「ただ耳をひらいて、物を思わずにいた」という聴覚や、「めっきり暮色の深くなった道をたどり返すうちに、だんだんに強く、人のにおいを嗅ぎ取った」とか「薄暮の中をあの分岐点に差しかかったとしたら、無意識のうちに、人のにおいの濃いほうへ惹かれるということは考えられる」という嗅覚へのこだわりである。このシーンでは「におい」という語句が十三回も用いられており、いかに嗅覚にこだわっているかが分かる。この山登りで知り合った男の気配や背中に、主人公の「私」はいつまでもこだわることになる。男が主人公に近付いて来たのも、山の中で道に迷って他者の臭いや気配に敏感に反応したせいではないかと主人公は思うようになっている。ここでは他者との人間関係やトラブルなどとはおよそ無縁な、微妙な感性にこだわって描かれている。

結末には、「中山[四]で呑んだ酒もさめて家の前までもどり、二軒隣の家の戸口に、朝方には見かけなかった忌中の札の張ってあるのを横目に睨んで通り過ぎた。玄関からあがってその足で仕事部屋に入り、コートを着たきり、棚のあたりに積み重なった書類を掻き回して、やっと一通の葉書を取り出した。――私は二度目の入院で一時は危ぶまれて居た生命の危機を脱し社会復帰とはいはない迄ももうすこし生きる時間を与へられたやうでございます。故人からの手紙だった。私よりもずっと年上の、とうに自適の人で、近所でときどき立ち話をするだけの間だったが、私の病後の回復期の姿を見かけては、すっかり良くなりましたね、どうですか、ゴルフをやって見ませんか、ゴルフを、楽しいものですよ、などと声をかけてくれたので、先の手術に続いて再入院と聞いて私が遠い病院まで見舞いの手紙を送ったその返事だった。日付はちょうど一週間前の日曜日になる。年内には帰宅出来る見通しが出て参りましたことを唯々感謝して居ります、とあった。よいお年をお迎への程御祈り申しあげます、と結んであった」とある。[五]「私よりもずっと年上の、とうに自適の人」の手紙では、「いはない」や「与へられたやう」や「お迎へ」のように、あえて旧仮名遣いを用いてその人物と巧みにつないでいる。かなり年輩の友人であったことが、旧仮名遣いの表記によって自ずと示されている。

「背中ばかりが暮れ残る」という小説の中に、他者の葉書という別のテクストが意図的に取り込まれている。しかもそれは実は死者からの手紙だというのである。この作品では結末近くまで初老を迎えた主人公の身辺や心境が綴られていたのに、結末において見事に反転する効果を上げている。小説としてのストーリーを意図的に作り出すことには否定的な思いが強い作者ではあるが、この結末では反転した面白さを遺憾なく示している。

小説の結末近くまでは主人公の内面を描くことに終始する形で展開していたが、結末では他者の人生が作品の中にさりげなく取り込まれている。もっともこの他者も、所詮は老病死の苦しみを背負いながら生きる主人公の分身という捉え方ができよう。人は日々往生しながら生きているという古井の人生観が如実に反映している。

なお、この結末について大杉重男は講談社文庫の「解説」で、「末尾には『故人からの手紙』が現れるが、ある意味であらゆる言葉は生前の言葉、死者の言葉であり、そしてその認識から生じるのは非日常への飛躍ではなく、『よいお年をお迎への程御祈り申しあげます』といった、今日の日常を大切にしなさいというユーモラスな勧告に外ならない」と述べている。だが、この故人からの手紙は、我々の生のすぐ隣に死が潜んでいるという認識を実感的に描き出す効果を果たしていると捉える方が妥当であると言える。主人公にゴルフを勧める故人については結末に僅かに登場するだけだが、この手紙にイロニーやユーモアの意識は乏しいと思われる。この手紙に微妙なフィクションが入り込んでいる余地はあるが、大杉氏のように深読みをすることは、ここでは必要ないだろう。

次に「背中ばかりが暮れ残る」について、二項対立と両義性という視点から考察する。この作品には、現実と幻想、この世とあの世、自分と分身、現在と過去、小説と随想などの二項対立と、それらの両方を併せ持つところが巧みに描き出されている。しかも単に二項対立的な要素が混じり合っているのみならず、先に挙げた様々な二項対立的な要素が複雑に交錯している実相を、冷徹に見据えて描き出している。

主人公の「私」は三途の川に佇むような心境に陥りながら、老いた生身は娑婆に留まり、この世の実相を凝視している。無常迅速だった来し方に思いを馳せる主人公だが、だからといってこの世の現実を見詰める目が曇らされているわけではない。

学生時代の回想では、山登りの帰りに四、五歳上のサラリーマンと知り合いになるが、いつかその男の後ろ姿が主人公の分身であるかのように思うと共に、そのように屈折した思念に読者を引きずり込むように仕掛けられている。二十歳代の「私」が著述に専念して終日机の前に座るようになった頃を境に、五十歳代となった「私」の想像の中に何年も座り続ける男の姿が、脳裏に浮かぶようになったというのである。何年も座り続ける男は、学生時代に偶然知り合いになった四、五歳上の男と思っていたが、いつか自らの分身のように思えてきてしまう。そのことについて、主人公自身も「筋の曲

がりくねった話である。筋が通っているとは言い難い。時差の混乱がある。彼我の混同も窺える」と捉えている。ここには現在の自らの姿と過去の記憶とが混沌としたまま入り混じっており、自己と自らの分身であるかのような他者が未分化のまま存在している。社会や世間に背を向け、人生を背中に象徴させるように生きてきた男の姿が、初老の主人公の心境として描き出されている。

少年時代の回想では、喧嘩をして逃げていく相手の背中や米兵を乗せた列車などが主人公の脳裏に浮かんでいる。それらは荒涼とした淫らなものにつながるが、その頃に味わった悲哀は人生の黄昏といった現在の認識にも及んでいる。

結末では、故人からの手紙が置かれるが、ここでは死と生のあわいに日々を送る主人公の姿が描き出されている。この他者の葉書は、我々の生のすぐ隣に死が潜んでいるという認識を実感的に描き出す上で、効果を上げている。まさに古井が考える〈往生しながら生きているという人の世の実相〉を具体的に描き出しており、生と死という二項対立でありながら、混沌と入り混じっているのである。

三　実生活に即して

「背中ばかりが暮れ残る」の中に、「男の背に向かって私は呼びかけ、その声がやや迫りかかる。ここ数年来の習いだ。そして私自身も五十代の中途を過ぎた」とあり、この作品を執筆した当時五十七歳の古井の年齢とも符合している。自らの心身や身辺の状況を踏まえて、随想的に実感的に記された小説であると言える。

年譜的な事実との関連について、作品内に出て来る順序ではなくて、あえて主人公の年齢順に並べ変えて見ていく。この作品では現在の主人公の心身の状況のみならず、過去の記憶も重要な要素となっている。回想とは改変であり、忘却ですらあると言われたりするが、本作ではそのような要素はほとんどないと思われる。

戦後に米兵を乗せた列車を見た際のエピソードなども記されているが、昭和二十年に八歳であった古井の年譜とも符合している。焼跡闇市といった殺伐とした時代を、まさに身をもって潜り抜けてきたのである。

学生時代の主人公について、「世間に出て給料を取っているはずの年に私はなっていたが身分は学生に違いなかった」とある。ここでは、院生の頃に山登りの帰りに、四、五歳上の見知らぬサラリーマンからご馳走してもらった体験が記されている。

「今から三十年あまりも昔の話になる。その翌年の春、私は地方の大学の教職にありついた」とあるが、「地方の大学の教職」というのは、昭和三十七年四月、二十五歳の時に金沢大学法文学部助手として着任したことを踏まえている。

「城下町の裏小路の二階の下宿に若い私の腰がとにかく据わったその頃を境にして、古アパートの一室で終日変わらず、年中変わらず、坐り机に向かう、いま現在の私の想像上の人物の背後から、時

間が断ち切られる」とある。これは金沢市の中村印房の二階に下宿していた体験を踏まえている。立教大学も含めると、ドイツ語の教員として八年間勤めたが、論文を作成する他に、ヘルマン・ブロッホ『誘惑者』やロベルト・ムージル『愛の完成』等の翻訳に没頭していた。その後昭和四十五年三月、三十三歳の時に学園紛争の最中で立教大学助教授を辞職した。作家に転身したが、執筆に専念するということでは似たようなものだと主人公は捉えている。それでも一方では、主人公は「職を離れ」て、「世間に背を向けた」という意識を引きずっている。

机に向かって座る影のような男のことを思う場面では、「分身のようなものではない。自分とはおよそ異った生涯を送る他人と感じている。年齢も自分よりは四、五歳上と見ている。一昨年亡くなった長兄と同じような年まわりになるが、長兄は最後の日まで働いていた」とある。平成三年十月に亡くなった長兄のことを作品の中に取り込んでいる。平成六年三月にこの作品は発表されているので、厳密には一昨々年に亡くなったことになるが、余りにも細かなことなので、あえて「一昨年亡くなった」と記したのであろう。

「日曜日は晴れあがって、私にとっても長年恒例の、暮れの中山へ出かけた」というのは、競馬を好む古井の体験を踏まえている。何年にもわたり年末の恒例行事のようになっていたのは、随筆などにも示されている。

古井の体験や思索が踏まえられていることが、この作品の評価とつながる訳では必ずしもない。「どうして、自分がひと間と少々のアパートで暮らしているのか。どうして、女に養われているのか。子供たちは生まれていなかったことになるのか」と、現実とは異なる幻想が鮮烈にイメージとして浮かんだことに、主人公は戸惑い、こだわっている。妻子もありマンションで暮らしている作者の脳裏には、随分と矮小化された自己像がイメージされていることになる。そこでは、人の世の無常迅速を実感しながら、生活の部分を捨象した実存の裸形の姿が、もう一人の自分の姿として思われていると言える。

ところで、昭和二十年の終戦の年に古井は八歳であったし、五月二十三日の山手大空襲の夜には罹災もしている。戦後の焼跡闇市といった混乱した世相もくぐり抜けている。昭和四十五年三月、学園紛争の只中で立教大学助教授を辞職してペン一本の生活に入っている。このような状況は「背中ばかりが暮れ残る」でも部分的には描かれてはいるが、社会的及び政治的な状況は後景として退いたままで、古井の作家生活においては、正面から取り上げられることはほとんどなかった。あくまで、主人公の揺れる内面を掘り下げて丹念に描くことに重点が置かれている。あれも生業、これも生業といった諦めのような心境を抱えたまま、この世の実相をにらみ据えている。

この作品も含めて古井のこの時期の作品には、彼の年譜上の事実と符合する内容が描かれていることが多い。そのことでリアリティ

や説得力を獲得していることは間違いない。一方で小説としてのストーリー性まであえて削いでいるところは、やはり小説としての物足りなさやある種の限界を指摘されても仕方がないところがあろう。それでもフィクションをあえて拒絶して、ありふれたセンチメンタリズムには向かわないという、作者の一貫した姿勢や覚悟が窺える。

四　結びに

「背中ばかりが暮れ残る」は随想的な要素がある作品だが、この傾向はこの時期の古井の他の作品にも当てはまる。随筆の一節めいたこの表題には、従来の小説の固定観念から脱しようとする古井の意図が示されている。

随想のような小説なのでリアリティはあるが、物語性に乏しい。ここには、意図的にストーリーを作って読者を感動させようとする小説の在り方への根深い懐疑がある。意図的に物語を作り出すことを嫌って、平凡で退屈な人生の実相を虚心に書き綴っている。現代文学を先導する古井が、どのような変容を遂げて来たのかを如実に示している。

古井には随想化することで、かえって現代人の表現力は強くしぼられるという信念がある。随想化した小説の持つ意味について、掘り下げて検証する。

柄谷行人は「古井由吉さんをしのぶ」[六]（「朝日新聞」令2・3・4）の中で、「彼は80年代半ばごろ、小説らしい小説を書くのをやめたんじゃないかな。一見すると、エッセイ風です。しかし、エッセイとは、本来『試み』、『実験』という意味でしょう。その意味でなら、彼の作品は常にエッセイだったともいえます」と的確に指摘している。[七]随想的に表現することが、古井にとっては実験的でラディカルな文学的営為であったという実態が見えて来るのである。わざとらしい物語を作って読者を意図的に感動させようとするのではなく、現代に生きる作家の心身の状況を虚心に綴ることに意義を見出しているのである。森の中の一本の木にすぎない作者の心身の状況を丹念に描き出せば、それが現代人の内面の描出につながり、ひいては現代の読者との接点になるという確固たる信念が窺える。

ストーリーを展開させて読者を感動させようとする小説を嫌って、クールな現代人の感性に合うような〈読者を感動させないような小説〉をあえて目指したと見ていい。その意味では、少年や小動物を作品の中に描き、感動的なシーンを描き出すことを好むストーリーテラーの宮本輝などとは、およそ対極にあったと言える。

現在とは、〈知〉の枠組みが大きな変化を遂げようとしている時代だということも耳にする。近代文学の在り方そのものに変容を迫ろうとして、実作による古井なりの問題提起だったのである。現在では生活の在り方や価値観、更には意識・感性・欲望などが従来と異なったものになりつつあることを実感していた故に、実作による古井なりの小説観や文学観の提示であったはずである。古井自身が評

論によって、そのようなことを声高に主張している訳ではないが、古井の一貫した信念の反映であると見ていい。

赤裸々に自らの体験を記す私小説とは違って、一見ありふれた日常を送っているように見える主人公の内面のひだを古井は詳細に描き出している。荒涼とした内面を抱えたまま、それが生きることだと覚悟を決めた小説家の心身の在りようが丹念に綴られている。

「背中ばかりが暮れ残る」では、この世の末とも思われるうらぶれた光景の中での人間達の生老病死の姿が、リアリズムでありながら象徴に達するような筆致で見事に描き出されている。この作品の主人公には、束の間に人生の歳月が過ぎ去ることへの侘しさや諦めがあり、人生の無常迅速を痛切に実感している。主人公の内面では、遠い過去の記憶が、重層的に現在の生と結び付いている。

本作には、淡々とした筆致の中に深い渋みがにじみ出ている。随筆と小説のあわいのところで、「物語になりにくい自分の生活とか体験、想念、観念を虚心に書き綴ってい(八)る。一つのストーリーを作って小説を展開するのではなく、置かれた時間や空間を虚心に写し取っている。死や災難や狂気などにまといつかれた人生でありながら、無事息災の日常を凝視し、孤立した内面の襞を微細に描き出している。その意味では、この作品は人生の境涯を振り返る心境小説の側面を持つ佳編と言える。

【注】

(一) 短編集『陽気な夜まわり』には、「陽気な夜まわり」「飯を喰う男」「客あり客あり」「影くらべ」「蝙蝠ではないけれど」「木犀の日」「鳥の眠り」「背中ばかりが暮れ残る」の八編が収録されている。

(二) 「先導獣の話」(昭43) でも、他者の視線を気にせず夕立ちの中へ無頓着に歩み出す一人の男について、「私にはなぜかいかにも犬儒的に映った」と捉えている。

(三) 背中というものの持つ意味ということでは、「朝の客」(『聖耳』所収、平12、講談社) の中に「廊下を遠ざかりながら、背中で物を思うというようなことはある」とあり、「徴」(『野川』所収、平16、講談社) の中にも「皆、背中が痩せた。そのことをお互いに知ってもいて、さいわい背中は自分で見えないからな、とお互いに笑っている」とある。どちらにも「背中」へのこだわりが示されている。なお、古井の背中へのこだわりは、小池昌代の「背・背中・背後」(『黒雲の下で卵をあたためる』所収、平17、岩波書店) に通うところがある。小池にとって、背後は目に見えないけれど重要であり、目に見えないところまで掘り下げて描くことに文学の意義を認めている。同様に古井もこの作品では、目には見えないがただならぬ気配が漂う背中に焦点を当てている。世間に背を向けて、意固地なまでに座り込んで半生を送ってきた姿へのこだわりが示されている。なお、背中に注目した作品は他にも梅崎春生「Sの背中」(昭27) や綿谷りさ「蹴りたい背中」(平15) 等がある。

(四) 中山競馬場のことで、競馬を好む古井には「中山坂」という小説もある。詳しくは拙稿「古井由吉『中山坂』論」(「九州産業大学国際文化学部紀要」第70号、平30・9) を参照頂きたい。

(五) 同様の内容は、「埴輪の馬」(『野川』所収、平16、講談社) にも記されている。その中には、「都心を地下鉄で横切って夜の更けかかる頃に家の近くまで戻り、二軒手前のお宅の前を通り過ぎる時、もう十年ほども昔、同じ年の瀬の日曜の中山からの帰りに、そこの扉から忌中の札が目に止まって、はてと首をかしげながら家に入り仕事部屋の机の脇やら棚の上やらを掻き回す

と、つい何日か前に届いた、千葉の先のほうに再入院中のその人からの、葉書が見つかった、ということのあったことを思い出した。年内には帰宅出来る見通しが出て参りましたことを唯々感謝しております、とあった。消印は八日前の土曜日だった。よいお年をお迎えの程御祈り申し上げます、と結んであった」とある。同じ素材を小説に再度用いるのは好ましいとは言えないが、いかにこの体験が切実なものであったかを如実に示している。彼岸と此岸のあわいに生きている現代人を象徴的に示すエピソードとして効果的であると判断したのであろう。

（六）古井は令和二年二月二十七日に逝去したが、その直後にまとめられた文章である。

（七）この柄谷の古井に関する言説は、「近代において文学が特殊な意味を与えられていて、だからこそ特殊な重要性、特殊な価値があったということ、そして、それがもう無くなってしまったということ」（柄谷行人『近代文学の終り』平17、インスクリプト）というような柄谷の考えともつながっている。小説という形式や制度への根深い懐疑が根底にあり、意図的に近代の小説からの脱構築を試みるというのである。

（八）「週刊ブック」（平6・11・6、NHK衛星放送2）の中の古井の発言である。